

# 真昼に別れるのはいや

笹沢左保著



「文華新書」刊行のことば

新しい宇宙時代に生きる現代人は、今日に強く、さらに明日に逞しく生きるために、どんなまでに文化教養の指針を求めています。

この新書は、激動と混乱の世代に知識を整理し、新しい法則を追求し、美と愛、生と死、結婚と性などについて、尊い価値を創造し、生活を豊かにすることを願ひ刊行するものであります。そして、今日と明日への教養・実益を追求するものと、興趣のつきない読物とを、シリーズとして、文化の華を開かせたいと念願します。

なお「文華新書」の内容、造本など既刊のもの及び今後の刊行について、ご意見などお寄せ下されば幸甚です。

真屋に別れるのはいや 新編 笹沢左保推理小説選集 8

昭和43年3月19日発行

¥ 280

著者との  
諒解により  
検印廃止

© 著者 笹沢左保  
発行者 大島敬司  
印刷所 飯島印刷株式会社

発行所 東京都千代田区丸の内丸ビル783区 株式 日本文華社

TEL 東京・(201)2752 4750 (211) 5063振替 東京 43444 番

○万一落丁、乱丁の場合は、返送次第本社でお取り替え致します。

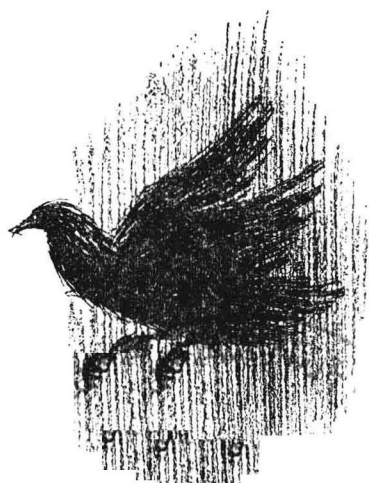
○小社発行品切れの図書雑誌は近くの書店又は本社へご注文下さい。

川越図書館



# 真昼に別れるのはいや

笹 沢 左 保



新編 笹沢左保推理小説選集 8





カバ―装画  
挿画  
題字

重原 保男  
横塚 繁  
長谷川 栄一

真昼に別れるのはいや

## 憂　　慮

### 1

ブザーが鳴った。

新倉多美子はミシンをとめて立ち上った。気がついてみると、もう黄昏たそがれであった。アパートのこの小さな部屋にも、霧きりに似た夕闇が漂っている。窓から見下せる赤坂界隈の街並に、バラ撒いたような灯がつき始めていた。

兄だな、と多美子は思った。ブザーの鳴り方でも分るし、兄が帰ってくる時刻でもあった。

多美子は台所へ出た。リノリュウムが足袋の裏にひんやりと冷たい。梅雨つゆ時特有の湿しめった空気が濺もどんでいた。ドアは台所についている。多美子はたたきに乗りに出して、ドアの掛け金はずした。

「お帰りなさい……」

ドアを押しあげると、男のズボンと靴が見えた。やっぱり春彦はるひこだった。

「定刻より早目じゃない？　御飯の仕度、大至急でやらなくちゃあ」

と言って、多美子は怪訝けげんそうに春彦の顔を見なおした。

春彦の口許が綻<sup>ほころ</sup>んでいる。多美子の唇が小さく開きかけんになった。軽い驚きの表情だった。  
《兄が笑っている！》

この八カ月間、見たことのなかった春彦の笑顔である。それも作り笑いではなかった。昨日までの春彦には、陰気なトゲトゲしさが残っていたが、今の彼にはそれがない。目まで柔和に微笑していた。

「お母さん、デパートへ行くって出ってたけど、まだ帰ってこないのよ」

そう告げなければならぬことではなかったが、多美子は意味もなく口にした。兄の変貌ぶりに戸惑ったのである。

「お客さんだ……」

春彦は多美子を見ないで言った。半ば照れているような口ぶりだった。

「あら……」

小さく叫んで、多美子は反射的に背のびしてドアの外を覗いた。兄の背後に白っぽいものを身につけた人影が佇んでいる。若い女性のようなであった。

「じゃあ……早く」

多美子は再び、訳もなく狼狽した。調理台を遮蔽<sup>しやへい</sup>するカーテンを引き、スリッパを蹴散らかして部屋へ戻った。部屋には縫いかけの浴衣布地が散乱している。手早くそれを片付けて、二階へ通ずる階段の二、三段を、乾いた雑布で拭いた。

「失礼致します……」

すきとおった声と一緒に、柔かい香料の匂いが部屋へ入って来た。

「さあどうぞ、取り散らかしておりますけど……」

多美子は相手の目を見ないで頭を下げた。

「多美子、紹介しておこう。藤波葉子さんだ……」

春彦が俯向いたまま言った。その足許を見て、多美子はハッとした。兄の靴下の爪先に穴が空いている——。それを隠すように春彦の真ん前に立って、多美子は藤波葉子の方へ向きなおった。

「多美子です。兄がいろいろとお世話になりました……」

「こちらこそ……」

多美子は初めて相手を直視した。美人だった。顔立ちは一見して冷やかに感ずるほど、上品に整っているが、黒く燃えている大きな瞳が情熱的に見えた。睫が僅かな反りを見せて、キチンと揃っている。多美子は、すみれ草という印象を受けた。

「じゃあ二階へ……」

春彦が言った。

「お邪魔致します」

藤波葉子は多美子の脇をすり抜けるようにして、春彦に従った。七分袖の白いブラウスに淡い紫色のタイトスカートは、すぐ階段の上へ消えた。それを見送って、多美子は綺麗なスタイルをしているなと思った。



多美子は部屋の中央へ戻った。天井を見上げる。勿論、二階からは何の物音も聞こえて来ない。二階が一間、階下に一間と台所、という変わった造りのアパートだから、隣り合わせの二間続きと違って、別室の人声や物音が聞こえてくることはなかった。

《何をしたらいいのか……》

多美子は落着かなかった。

兄が若い女性を連れて来たと知った瞬間から、多美子は狼狽している。しかし、それは悪い意味での狼狽ではなかった。むしろ、大きな期待がともなった狼狽だった。望み薄の期待が不意に実現した時のように慌てたのである。

多美子は、兄の女客を歓迎した。何とかして、充分なもてなしをしたかった。どうしたら藤波葉子が、ここへ来たことに満足するだろうか。今後もここへ来る気持になるだろうか。ひいては、彼女と兄が親密になることを願っていた。

るのだ。

結婚する気のなかった娘が初めて男性を家へ連れて来たのを、迎えた時の母親の気持と同じであつた。

何はともあれ、お茶を入れなければ、と多美子は気がついた。

台所へ行き、ガスに火を点けた。火を点けながら、お茶よりジュースの方が気が利いているかも知れない、と思ひなおした。ガスの火を消して、冷蔵庫の中を覗いた。オレンジジュースが二本あつた。その横に箱詰めのまま、生イチゴが置いてある。ああいうお嬢さんには生イチゴの方が向いている、と多美子はまた迷つた。

「何をしてるの？」

草履の裏をドアの外のコンクリートにこすりつける音がして、そう声がかかった。ドアが半開きになっている。腕にかかえられたデパートの包装紙の買物包みが見えた。母親の亮子だった。

「本当に梅雨<sup>つゆ</sup>って嫌ね、草履がメチャメチャ……」

亮子は愚痴を呟きながら、後手にドアをしめた。まだ草履の裏を気にしている。

多美子は何となくホッとした。藤波葉子の接待を、母親に任せられるという安堵であつた。

「お母さん、ビッグニュースよ」

多美子は両手でメガフォンを作り、息を言葉にした。

「なあに？」

「お客様よ、兄さんのところへ」

「どなた？」

「ううん、普通のお客様じゃないわ。女性、女性なのよ。それが凄いい美人なの……」

「へえ。それがビッグニュースなの？」

亮子はあまり気乗りのしない様子だった。それよりも、今度は足袋の汚れを気にしている。

「お母さんって、案外冷たいのね」

多美子は頬をふくらませた。母親が話に乗って来ないのが不満だった。

「だって、多美ちゃん——」

「兄さんが、若くて綺麗な女の人を連れて来て、今二人っきりで二階にいるのよ。これがビッグニュースじゃないって言うの？」

「だからって、その女の方が春彦の恋人とは限らないでしょ」

亮子は娘の剣幕に、呆っ氣にとられたようだった。

「恋人とは行かなくても、それに近いと思うわ」

「会社の女の人かも知れないでしょ」

「そんなんじゃないって……」

多美子は何とかしように肩をゆすった。藤波葉子を連れてドアの前に立っていた時の兄の笑顔  
を、多美子は見たのである。兄の顔には、肉親だけが汲み取れる微妙な感情の表われがあった。  
それを多美子は「生気」と信じている。

「兄さんはね、とっても嬉しそうな顔して帰って来たのよ」

「そう……」

亮子も真剣な顔になった。もしかすると——という期待と、その反面にある不安が、母親としての彼女を緊張させたのである。

「好きな人だったらいいんだけど……。敏江が死んで四年、千秋が死んで八カ月になるものね。春彦もそろそろ、過ぎ去ったことよりこれからのことを考えなくてはね」

亮子も二階の様子を窺うように、天井へ目を向けた。

「全ては時が解決してくれるって言ってたでしょ。その解決の時が来たっていうわけよ」

母親は一緒に白い喉のどを見せて仰向あおむいた。春彦の過去は不幸だった。それだけに、その過去に訣別を告げて欲しかったのだ。

春彦は六年前、二十五歳の時に結婚した。相手は敏江という家具問屋の娘だった。だが敏江は二年後に、心臓弁膜症べんまくしょうで死んでしまった。子供は女の子が一人いた。千秋という母親似の、色白の涼しげな目をした子供であった。

春彦は敏江の死はそれほど深刻に考えなかったようである。平凡な見合結婚だったし、もともと丈夫ではなかった妻の病死だ。すぐ気持の整理はついたらしい。それに千秋という生き甲斐があった。亮子も多美子もいることだし、千秋の世話を見る者に事は欠かなかった。春彦に再婚の意志はなく、まあ機会を見てということになっていた。

しかし、その千秋が去年の十一月一日、自動車事故であっけなく死んでしまったのである。これは春彦にとって、ひどい衝撃だった。

千秋は五つになったばかりの、可愛い盛りであった。その千秋が、突如としてこの世に存在しなくなったのである。家の中にはポツカリと穴があき、家族の間にも沈黙の谷間が出来てしまった。

元来が無表情だった春彦は、翳のある、まるでデスマスクのような顔になった。口数も少なく、目はいつも空間を覗めていた。

可笑しいことを言っていると、春彦が頬を引きつらせて無理に笑おうとするので、多美子は冗談を言うのもやめた。

ただ黙々と働き黙々と生きている一種の廃人——春彦がそうになってしまうのではないかと、亮子は危惧したことさえあった。

——その春彦が藤波葉子という若い女を家へ連れて来た。大袈裟に言えば、八カ月間も閉されていた扉が、今日初めて開放されたようなものだった。

会社の部下だとか、単なる知り合いの女性であれば、春彦がわざわざアパートへ伴ってくるはずはない、と多美子なりの推量はあった。少なくとも、好意以上のものを持ち合っている者同士だと想像出来る。プロ野球に夢中の春彦が、テレビのナイター中継を犠牲にするつもりなのだ。藤波葉子に、春彦はナイター中継以上の重きを置いていることは確かだった。

「ねえ、何かうんと御馳走しましょうよ」

多美子は母親の背中に抱きついた。

「あんた、自分のことみたいにはしゃいでるのね」